

ステークホルダー・ダイアログ

2008年6月6日、各界からの有識者7名をお招きしてステークホルダー・ダイアログを開催しました。ダイアログに先駆け、国道1号原宿交差点立体工事作業所および大成建設技術センターを見学し、その後同センターで意見交換を行いました。

● 作業所におけるQ&A

国道1号原宿交差点立体工事作業所では、騒音・振動の少ない、大断面を分割して掘削するハーモニカ工法の現場をご見学いただきました。見学後有識者の皆さまよりいただいた質問に、当社担当者が回答したものを抜粋しました。

Q 近隣住民向けの見学会は開催する予定ですか。

A 6月中に2回、予定しています。町内会で参加希望者を募っていただき、掘削現場を地上からご覧いただく予定です。

Q 工事に対する苦情は来ていますか。どのような時間帯が多いですか。

A 事前に個別にお伺いして工事の説明をさせてもらっているのですが、それでも2、3件来ています。横浜市の条例で定められた基準は満たしているものの、地下工事に先立ち道路を拡幅する際の騒音・振動への苦情があったため、すぐに対応し、お詫びに伺いました。騒音を完全になくすることはできませんが、誠実に対応することが大事と考えています。騒音に対する苦情の時間帯は大半が夜間です。

Q 作業員の安全管理はどのように行っていますか。

A 当社は、専門工事業者の安全衛生責任者を通じて行っています。土木工事は建築工事より職種が少ないため、現場での作業員の入れ替わりはそれほど多くはありません。また当社からもずっと同じ作業員で継続してほしいと専門工事業者に伝えてあり、その点では作業員との意思疎通は図りやすいと思います。

Q 専門工事業者はどのような基準で選定していますか。

A 支店と協議しながら、作業所ごとに業者を選定しています。当工事は、狭い所で重量物を扱うことになるため、専門的な知識があり、その作業性を熟知した、能力のある企業を選ぶようにしています。特に安全面については、関係する法律以上の取り組みを要求しています。「大成イズム」と言

いますか、大成建設のやり方やスタイルを理解して下さる企業を選ぶようにしています。

Q 廃棄物の分別についての教育はどのように行っていますか。

A 新たに作業に参加する作業員の方々に、作業所ルールを説明するほか、繰り返し指導し、機会を見つけては教育を行っています。ただ、建築現場ほど廃棄物の種類は多くありません。「10種類に分別」という社内の指導に従って当現場では、現在該当する6種類について分別しています。

Q トンネルの上部はどのように整備する予定ですか。緑地にするのでしょうか。歩行者が道を渡れるような工夫は検討していますか。

A 利用方法は、今後、管理者である国土交通省が地域住民の方々と協議しながら決める予定と聞いております。



国道1号原宿交差点立体工事作業所見学



■ 国道1号原宿交差点立体工事の概要

工期：平成18年3月18日～平成21年3月31日(一期工事)

工事概要：工事延長：828m

アンダーパス区間：420m

ボックスカルバート区間：186m(ハーモニカ工法：73m、開削工法：113m)

W型擁壁区間：234m(開削工法)

〈 特徴 〉

1. 神奈川県内渋滞ワーストワン交差点立体工事であることの注目度
2. 当社固有技術である「ハーモニカ工法」の採用
3. 高度技術提案対話方式による設計・施工一括発注工事
4. 「エコモデル・プロジェクト」作業所
5. 「快適職場推進計画認定証」を取得



第1テーマ 地球環境・技術(温暖化対策、生態系保全、建設生産物、技術力、先進技術)

第2テーマ 労働環境(働きやすい職場環境、社員の多様化、サプライチェーン)

ファシリテーター



河口 真理子氏
(株)大和総研経営戦略研究所 主任研究員

ご参加いただいた方々



デイヴィス・スコット氏
立教大学経営学部 教授



二羽 淳一郎氏
東京工業大学大学院 教授



野口 千歳氏
国際協力NGO (財)ケア・インターナショナルジャパン 常務理事・事務局長



原口 真氏
(株)インターリス্ক総研 コンサルティング第一部 主任研究員



松田 布佐子氏
(株)環境経済研究所 所長



若林 千賀子氏
若林環境教育事務所 代表

クライアントにCO2排出量削減の付加価値提案を

河口 本日は地球環境と労働環境という2つのテーマについて議論をしていただきます。地球環境問題では特に温暖化と生物多様性に焦点を当てていきたいと思っております。

松田 日本全体が温暖化防止に向けて動き始めています。大成建設さんの業務そのものが生活と密着した建物や構造物と大きくかかっているわけですから、果たす役割は大きいと思います。

デイヴィス 建物の使い方によってCO2排出量は大きく変わってきます。建設業者は、建物のライフスパンを考えて、設計

の工夫で使用時のCO2排出量を削減するための「高付加価値提案」ができる立場にあります。大成建設ではクライアントに、どのように提案をされているのでしょうか。

大成 公共土木の入札は、昔は100%価格勝負でしたが、現在は30%ぐらいが「技術提案」で、そのうち3分の1は、CO2排出量の削減や生態系保全など、環境関連の技術提案が求められます。環境に配慮した設計は市場からも要求されるようになってきており、特に公共工事は、ここに力を入れないと受けられないようになってきています。

活動の「見える化」が必要

二羽 大成建設で他社に先駆けて開発した超高強度繊維補強コンクリートの設計・施工技術は素晴らしいと思います。圧縮強度が従来のコンクリートの4~8倍あり、引張強度も高い。鋼製のファイバーが入っているのでひび割れも防げる上、100年以上の耐久性があるという、コンクリート工学分野で数十年に一度のブレークスルーと言われています。非常に注目を浴び、羽田空港のD滑走路の着陸帯など、さまざまな場所で使われるようになってきています。これに次ぐ第2、第3の環境技術の開発を目指していただきたいですね。

大成 超高強度繊維補強コンクリートは強い材料で、従来のコンクリートの1/5~1/2程度の量で同じ橋梁などをつくれるのが特徴です。構造物が軽いので基礎部分も減らすことができ、「酒田みらい橋」の例では従来のコンクリートと比べ、CO₂排出量をトータルで26%削減できました。材料がCO₂排出量の削減に結びついた良い例であり、今後もこうした素材の開発に力を入れていきたいと考えています。

松田 そのような提案ビジネスは、国に対して訴えてだけでなく、市民にも見せていただきたいです。控えめな社風の大成建設としてはこそばゆいと感じるかもしれませんが、例えば「ハーモニカ工法により施工時のCO₂排出量を何%削減しまし

た」といった成果を工事現場に掲示するなど、「見える化」を進めるといいと思います。

大成 「見える化」の大切さは強く感じています。特に、実際に現場や製品を見ていただくことが極めて重要だと思っています。ですから、お客さまにはできるだけ当技術センターにお越しいただき、個々の技術をご覧いただいています。特に製造、輸送時のCO₂排出量削減に大きく貢献できるダンボール製の空調ダクトには驚かれるお客さまが多いですね。

若林 いくら会社で熱心に環境に取り組んでいても、日常生活では何もしない、という「ダブルスタンダード」が多いのが現実です。社員の方たちが一市民としてどんな活動をされているのか、ぜひお聞きしたいです。

大成 社員個人々の環境意識の向上には建設業界としても力を入れており、環境に配慮した行動のチェックリストを数十万部作り、各家庭に配布するといった取り組みを行っています。

デイヴィス 企業の中には、単にCO₂排出量を減らせばいい、と思っているところも多いのですが、実は排出量は同じでもいいのです。同じ排出量でも創出する価値を増大させていくことが必要です。

生態系とのかわりが深い建設業

原口 建設業は、生態系にとって非常に影響の大きい産業です。その分、建設会社にとってのリスクも高くなります。今年5月には、生物多様性基本法が成立しました。今後は、建設用地に貴重な生態系があった場合など、工期の遅れや、建設ができなくなる可能性が生じてきます。ですから建設会社にも、生態系に関する知識が求められます。一方で大成建設は都市緑化技術な

ど、生物多様性保全に役立つ技術を数多く持っています。まだ「点」でしかないこうした技術を「標準スペック」として取り入れていっていただきたいですね。

大成 当社は山林を所有しています。これらをCO₂の吸収など環境保全や、これを生かしたビジネスとしても活用できるというのですが。



原口 社会貢献や環境教育など、活用方法はいろいろあります。エコリゾートにして、子どもたちが生態系を学ぶ場にするのも一つの方法です。

若林 社員の環境教育として活用することもできます。植林活動をしたいというご相談を受けることが多いのですが、その際に注意していただきたいのは、植林活動をする事だけの自己満足で終わらないでほしいということです。自然について知ったり、環境マインドを向上したりするための入り口として、植林を

行うなら大歓迎です。しかし、植林をしてそれで終わり、ということにはならないようにしてください。

野口 途上国でインフラづくりをする場合は、土木建設によって自然資源が減り、人々の生活が苦しくなるということがあります。いかに現地の人が必要としているものを大切にしていけるか、調査段階で、地域住民への影響まで考えていただきたいと思います。

働きがいのある職場をどうつくるか

大成 当技術センターは2007年にリニューアルしました。建設業は、人が環境をつくるものですが、同時に、出来上がった環境も人に影響します。ですから、建物の外にある豊かな自然を感じられること、そして研究員間で活発にコミュニケーションを図れることをコンセプトに掲げました。社員の目の輝きが変わってきたと実感しています。

大成 鳥を呼び込めるように横浜市緑の拠点を分析して植える樹を選ぶなど、生態系にも配慮しました。自然を感じられるように、冷暖房に頼らず窓を開けて風の流れを生かせるような工夫もしています。仕事をしていてもふと目を上げれば緑や空が見え、「感じる化」のようなイメージではないかと思っています。

二羽 技術センターのオフィスは、平均水準以上だと思います。今日、拝見した現場もよく整理整頓されていて感心しました。整理整頓は安全に直結するので、現場では非常に大切です。

松田 外の緑の葉が風でそよそよしていても、コンクリートとガラスで閉め切られた中では、感じないんですね。技術センターに最初に入った瞬間、ちょっと無機的に感じたのですが、外と中が一体化して自然を共有できる工夫があるといいですね。「見える」だけでなく「感じる」職場は、社員の心を開放し、ストレス解消や発想転換などプラス効果をもたらすのではないのでしょうか。

河川 縁側的な発想ですよ。中と外の空間をミックスして体

感できるような。快適なオフィスは、社員を大切にしている象徴であり、わかりやすいメッセージだと思います。しかし、従業員満足のためには、やりがいを満たすためのオフィスは一つ重要な要件ですけど、やはり制度がどういうふうになってきて、それをいかに生かしているかという点が重要です。良い制度なら社員が積極的に活用するように経営が関与していく姿勢が重要ではないかと思っています。大成建設では女性活躍推進室を設置したそうですね。

大成 2007年6月に設置しました。全国を回って女性社員の話を聞いたところ、仕事にやりがいを感じている人は責任のある仕事を任されている人であり、もっと責任のある仕事をしたいけれどチャンスがない、という女性社員が多いことがわかりました。ですから、まずは男性社員側の「女性はあまり責任のある仕事をしたくないのではないか」という思い込みをなくすることが必要だと思っています。

野口 女性の活用は、多様化の一つの側面でしかありません。ダイバーシティには、性別、文化、教育レベルなどさまざまな側面があります。いかにダイバーシティを価値としてポジティブにとらえるかが大切です。また、それがより良い製品やサービスを生むことにもつながります。多様性をエンジョイできる体質が生まれるといいですね。

デイヴィス 職場環境も重要ですが、社員が働きがいを感じるの、やはり自分の提案が採用され商品化され、活用されることではないでしょうか。社員の個性を尊重し、認める仕組みが必要です。個々人が個性や独創性を発揮して成長している会社こそが、伸びると思います。一方で、若い人の間で建設業の人気は落ちているようですが、若い人たちに、建設という社会インフラをつくる喜びをどう伝えていかも課題ですね。

大成 オフィスはいろんなことが出来るのですが、現場は本当に厳しいです。建設業は、機械とかITとかいろいろ発展していますが、基本は誰かが土をいじって、そこからものが出来ていくわけですね。そこには、働く人たちの仕事に対する楽しみ、大成のやり方でモチベーションを上げる必要が絶対にあると思うわけです。それができた企業が生き残っていくのだと思いますね。

河口 女性活躍推進室についてですが、「女性」という名前が

ついてしまうと、男性は、その瞬間に自分には関係のないことと考えがちです。女性だけを特別扱いにするのではなく、ダイバーシティというのは多様性を重視した考え方であるので、もう少し広い視野で臨まれたほうがいいのではないのでしょうか。今日の議論に共通していたことは、サプライサイドからデマンドサイドに頭を切り替えるということだと思います。施主さんから言われたことをやるのではなく、環境や社会的な側面も含め、彼らの要求の先を見据えて、本当に良いことを大成建設側からどんどん提案していくと同時に社会に対しても積極的に情報発信していきましょう。

大成 本日はさまざまな貴重なご意見をありがとうございました。「大成建設も変わったな」と思っていただけのように、ご意見を取り入れながら取り組みを進めていきたいと思っております。

～ステークホルダー・ダイアログに参加して～

第3回目の今年は、「地球環境・技術」と「労働環境」をテーマに、各界でご活躍中の7名の有識者をお招きし、意見交換いたしました。

今回のダイアログにおいて、環境問題への取り組みは、技術開発はもとより、新しい価値の創造にもつながる重要な課題の一つであると再認識しました。

また、労働環境では、国内外におけるダイバーシティの問題など、いろいろとご意見をいただき、仕事に対する喜び、やりがいを見出すためにハード面だけでなく、制度やその活用のあり方について考えさせられました。

ダイアログでは毎年、当社の方向性についての再確認や、あるいは、これまで気付かなかった点についてのご指摘をいただくなど、当社にとってはとても有意義で、またありがたく思っております。

昨年秋にはちょうどいただいたご意見に基づき、広報部に社

会貢献推進室を設置しました。当社の社会貢献の考え方を整理し、効果的な情報発信をスタートさせています。

今後は「大成建設らしさ」の表現の仕方や、「見える化」を進め、全体に当社の理念・個性・スタイル等の「大成イズム」の浸透を積極的に図ってまいりたいと考えています。

そして、このようなコミュニケーションを深めていくことが、社会と企業の継続的発展につながっていくと私は思っております。

これからもこのような機会を継続して、CSR活動を積極的に推進してまいりますのでご指導、ご支援の程よろしくお願ひ致します。



岡本 敦
代表取締役副社長
CSR委員会委員長

■大成建設出席者

- 岡本 敦 (代表取締役副社長・CSR委員会委員長)
- 河村 社一 (常務執行役員・技術センター長)
- 岡子 龍男 (経営企画部長)
- 佐藤 利省 (広報部長)
- 塩入 徹弥 (人事部女性活躍推進室長)
- 大竹 公一 (環境マネジメント部長)
- 田中 良弘 (土木技術開発部参与)
- 屋脊下 亮 (建築技術研究所環境研究室課長)
- 西尾 慎一 (土木技術部長)
- 阿波 正文 (国際支店管理部長)

▶有識者の皆さんが技術センターを見学しました

2008年6月6日の意見交換の前に、有識者の皆さまには2007年にリニューアルした大成建設技術センター(横浜市)をご見学いただきました。

明るく開放感のあるエントランスホール、吹き抜けに面した豊かな緑や、自席のパソコンで個人的に調節できるパーソナル空調に、「うらやましい環境ですね」との感嘆の声があがりました。また、2枚のフィルムに空気を入れることで、採光や遮光のできる調光天井や、ダンボールでできたダクトといった技

術を目の当たりにして、「子どもの図工でつくったように簡単なものなのに、斬新であり、環境負荷も少ない新技術が、これからはもっと求められるのではないのでしょうか」などのご意見をいただきました。



技術センター本館を見学する有識者の皆さん

技術センターで学生の皆さんと若手研究者が交流しました

2008年4月10日、次世代を担う学生の方に建設業をもっとよく知っていただくために、当社の技術研究員の働く環境等を紹介しながら建設業の魅力や将来性について意見交換を行いました。

午前中の技術センター見学会では、耐震、耐火実験設備や、海洋の波を再現できる造波機のあるプールのような水槽、住環境や快適性を体感できるバーチャルリアリティシステムなど研究開発の最前線施設を間近に見て規模の大きさに驚く一方で、芝の研究という意外な研究にふれ、「建設業に親近感がわいた」との感想をいただきました。

午後の座談会では、「建設業がこんなに環境技術に取り組んでいる様子が、一般にはあまり伝わっていないのではないか」「施工段階だけでなく、運用での省エネルギーを考えると一層重要ではないか」など鋭い意見が飛び出す一方で、

大成建設の研究員が「建設業は、文明を作るものだと思っている」などと、熱く語る場面もありました。

座談会の終わりには、「ゼネコンというと体育会系のイメージが強かったが、研究員の方の自信に満ちた仕事ぶりに触れて考えが変わった」「建設業は生活の基盤を支える重要な産業であることを改めて認識し、将来建設業に携わっていきたい」というご意見もいただきました。



学生の皆さんと若手研究者が交流

市民の皆さんと対話しました

2008年3月24日、大成建設本社にて、インフラの工事現場や、研究所などを見学に行く団体、「社会科見学に行こう」のメンバー6名と、当社の関連各部署の責任者8名が出席しステークホルダー・ダイアログが開催されました。「次世代にも信頼される建設業、スーパーゼネコンとは、その中で大成建設に求められるものとは」をテーマに和やかな雰囲気で見学が行われました。

「現代社会では、あらゆるものがブラックボックス化しており、その結果企業に対する不信感が生まれている。もっと現場を見せてほしい」という声が多数ありました。

また、無料で動画を閲覧できるウェブサイトに工事の映像を投稿してほしい、という具体的な提言もいただきました。

「現場を見学すると、建設業界が私達の生活を支えていることがよくわかる。それなのに、環境破壊や談合など、世間では業界に対して悪いイメージを抱いている人も多くて残念。個別の問題だけでなく、トータルで見て判断すべき」というご意見や、「道路や橋は50年、100年という長い時間使われることも考え、目先の費用のことばかりではなく、子孫に対する投資という視点から評価するべきではないか」という問題提起もありました。



市民の皆さんと意見交換

▶学生・市民の皆さんとのダイアログについては、大成建設ホームページをご覧ください。